

藝大通信

19

SEPTEMBER
2009

TOKYO

GEIDAI

東京藝大広報誌



特集 開かれた藝大の窓口

大学美術館と奏楽堂、10年の展開

[特集座談会]

薩摩 雅登 古田 亮 大石 泰 松島 穆

2009 年秋以降のお薦め展覧会 & 演奏会

教員は語る 第十一回 O JUN× 野口千代光

受賞学生インタビュー 櫻井稔 岩下晶子 森永泰弘

上野の杜の波瀾万丈 第八回 上野児童音楽学園

藝大の歩き方 第十一回 学生食堂



鈴木 雅明 (すずき・まさあき)

1954年兵庫県生まれ。1976年東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。78年同大学院音楽研究科器楽専攻（オルガン）修了。1979年アムステルダム・スウェーリンク音楽院入学。83年同音楽院卒業。1981～83年西ドイツ・ルール州立音楽大学（デュイスブルク）講師。1983～90年神戸松蔭女子学院大学助教授。1990年バハ・コレギウム・ジャパン（BCJ）創設。1990年東京藝術大学器楽科（古楽）助教授。2004年教授。
「バロック音楽の第一人者としての存在感は圧倒的で国際的に高く評価できる」として2009年に芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。
（撮影場所：奏楽堂パイプオルガン前）

第19号目次

3....11 特集

開かれた藝大の窓口 大学美術館と奏楽堂、10年の展開

〔特集座談会〕

薩摩雅登 古田 亮 大石 泰 松島 穆

軌跡と展望

大学美術館／関 出 奏楽堂／杉木峯夫

2009年秋以降の展覧会&演奏会

異界の風景／退任記念展「絹谷幸二 原色の軌跡」
岡山 潔退任記念コンサート／金 昌国退任記念コンサート

12....13 上野の杜の波瀾万丈

第8回 上野児童音楽学園 橋本久美子

14....16 Interview with the Brilliant Students

第2回 受賞学生インタビュー

櫻井 稔 岩下晶子 森永泰弘

17....19 教員は語る 第11回

藝大への期待・抱負・提言

O JUN×野口千代光

20....21 藝大の歩き方

上野の杜のキャンパスガイド

第11回 学生食堂 福本 豊 北澤悦雄

22....23 NEWS2009.2～2009.7

編集後記

東京藝術大学広報誌
藝大通信 第19号

編集発行
東京藝術大学藝大通信編集部

編集委員
長濱雅彦（美術学部デザイン科准教授・編集長）
斎藤典彦（美術学部絵画科日本画准教授）
檜山哲彦（音楽学部音楽文芸教授）
毛利嘉孝（音楽学部音楽環境創造科准教授）
大石 泰（演奏芸術センター准教授）

表紙デザイン
梶野沙羅（美術学部デザイン科教育研究助手）

制作
株式会社 平凡社

発行日
平成21年9月10日

お問い合わせ先
東京藝術大学総務課
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
電話 050-5525-2026 FAX 050-5525-2479
e-mail toiwase@ml.geidai.ac.jp
URL http://www.geidai.ac.jp

特集

開かれた 藝大の窓口

大学美術館と奏楽堂、一〇年の展開

一九九八年にオープンした奏楽堂と翌年開館した大学美術館。

一〇年におよぶ活動は広く社会に認められ

上野の杜の芸術拠点として定着した感がある。

藝大の窓口の役割を果たす二つの施設の

これまでを語るとともにこれからを展望する。

薩摩雅登

大学美術館 教授

古田 亮

大学美術館 准教授

大石 泰

演奏芸術センター 准教授

松島 穆

演奏芸術センター ステージマネージャー

構想の実現、活動の持続

司会 「藝大通信」では第四号と第五号で大学美術館と奏楽堂を特集しました。今回は、一〇年が経過した二つの施設を振り返るとともに、今後どのような展望や構想を持っているかについてお話をうかがいたいと思います。

薩摩 私は一九九〇年代前半、東京都現代美術館の準備室で設立の事に携わっていました。現代美術館がちょうど完成するこ



薩摩雅登（さつま・まさと）

教授—大学美術館

1956年東京生まれ。早稲田大学第一文学部美術史学専攻卒業。
早稲田大学大学院文学研究科西洋美術史学専攻博士課程満期修了。
ヴェルツブルク大学哲学部留学。
東京都教育庁新美術館（現代美術館）建設準備室学芸員を経て
1994年東京藝術大学芸術資料館助手。
2007年より現職。

ろ、こんどは藝大から、美術館設立の構想を進めるのでスタッフとして来てほしいと話があり、一九九四年一〇月一日ここに来

ました。同年一二月からハード部門を六角鬼丈教授（当時）が、ソフト部門を越宏一教授が中心となって本学の美術館構想を約三か月という短期間でまとめあげたんです。あのときは、大学の教員方の集中心力はずいものだとほんとうに感じしました。

一九九五年の秋に補正予算がつき大学美術館の建設が決まり、そこから一気に建設が進み、一九九九年秋に開館しました。で

すから、具体的な構想から完成までほぼ五年しかかかっていないんです。

大学美術館の柱は二つあります。一つめは二万八千点以上のコレクションの数々です。二つめは学内での教育研究成果をなるべくリアルタイムに展示し、社会に公開することです。そうした構想を実現するために、明確に機能区分した四つの展示室、展示面積よりも大きい収蔵庫、調査研究を行うための充実したバックヤードを持つ、地上四階、地下四階の設計がなされました。展示室が地下階と三階に分かれているのは、

全展示室を使用する大きな展覧会には不都合もありますが、当時はそうした企画展・特別展を想定していなかったんです。

ところが開館してまもなくすると、東京の上野という好立地に、これだけの展示空間ができたのですから、外部からの持ち込み企画が出てきました。現在では、そうした企画展も柱の三本めに加わったのです。一〇年かかってようやく、バランスの取れた方針が見えてきたというのが現状です。

大石 奏楽堂設立の構想と目的について当時の資料を見ると、音楽学部と美術学部の枠を超えて新しい舞台芸術の創造の場となるような施設をつくらうということだったようです。もともと音楽学部には旧奏楽堂があり、そこでコンサートや卒業式を行っていたのですが、非常に手狭になるとともに老朽化したため、台東区の協力のもと解体修理して上野公園内に移築しました。それ以来、学内には設備が整ったコンサートホールがない状態がずっと続いていました。演奏会を開くにも学外のホールを借りなくてはならないという不便を解消するため、新しいホールをつくらうという構想はあったのですが、なかなか実現には至らず、ようやく一九九八年に実現しました。それを機に社会に向けてさまざまな情報を発信していく基地ができたのです。

古田 藝大コレクションの特徴は、大学と

いう現場でつくられてきたものであるという点にあります。学生の卒業制作や修了制作の買い上げ、有名なものでは自画像などが毎年蓄積されていっています。そうしたシステムが構築されていくために大学美術館はあるわけですが、自動的にアーカイブ化されていくものをただ貯めているだけではなく、いかに見せるかということが重要になってきます。それには見せる技術を駆使することで初めて展示といえるものになるわけです。大学美術館は、いい展示とはどういうものかということ率先して発信していかなければなりません。「コレクション展」を中心に大学美術館の方向性を打ち出していくことが必要なのです。

単なる「名品展」ではなく、自ら明確なテーマを打ち出していく。切り口を鮮明にした括りで選ぶと、同じ作品群でも違うように見える。それこそが展示の醍醐味であるわけです。模索を続けてきた「コレクション展」ですが、一〇年かかってようやく軌道に乗ったところだと思っています。

松島 私は演奏企画の側面からではなく、「音響空間」としての奏楽堂についてお話ししたいと思います。奏楽堂ができたばかりのころ、藝大フィルハーモニアの練習を聴いたことがあります。そのとき反射音が多すぎて、響きがものすごいなかで練習していたことが印象に残っています。

コンサートホールというのはティンパニ（打楽器）にヒントを得ているんです。ティンパニは、中心を叩いても音にならないので、奏者は中心から離れた部分を叩きます。中心からエッジまでを三等分して、エッジから三分の二までをひっくり返した状

態が、ホールの基礎構造だと思っんです。そうすると三分の二までがステージで、正円でも楕円でも円みの応用をきかせればいいんですね。

またティンパニの胴体のなかはでこぼこなんです。ポルトガルのカトリック教会で、土台を乗せるコンクリートの部分に、畑の畝のような状態で床板を敷いてあるのを見たことがあります。つまり床下の部分がティンパニと同じデコボコした構造なんですね。日本の太鼓、三味線、琴も、なかには溝ができています。要するに乱反射しているわけです。そういった状態がホールの空間にあると音の流れとしてとてもよいと思っています。

奏楽堂でも、オルガンのシャッターを全部飛ばしてしまうとパイプの丸みがありま

す。その丸みを利用すると乱反射するでしょう。客席のほうは左右対称だから、必ず同じ方向に音が集合してしまうんです。だから客席の中央で聴くよりは、端や奥のほうで聴いたほうが聴きやすいという現象が起きるんですね。

学外連携と多彩なプログラム

薩摩 一九九〇年代前半に、文部省が「ユニバーシティ・ミュージアム構想」ということを提唱し始めました。これは明治以来の伝統を持っている国立大学には多くの学術標本などの資料が秘蔵されているはずなのに、ある先生の集めた資料が、研究室を引き継ぐ人によっては必ずしも大事に扱われずに、どこかに死蔵されてしまうという

ことが起こり得るのです。そうしたものを整理し、展示していくという構想です。九州大学の人骨コレクションや、東京大学の植物のタイプ標本など理科系の資料がほとんどです。そうした流れのなかで、大学美術館は比較的早い段階で開館することができたのですが、立場としては、美術・芸術資料に特化した「ユニバーシティ・ミュージアム」になるわけです。

藝大の大学美術館が、ほかのユニバーシティ・ミュージアムと決定的に異なるのは、先ほども言ったように上野という魅力的な立地条件なんです。しかし、ここはあくまでも大学の美術館ですから、持ち込まれた企画に対して、貸し会場的な利用を認めるわけにはいきません。ですから、どんな企画でも藝大の側から対案を出して、議論をしながら進めていくことがほとんどです。

あるいはこちらから発案してメディアに協力を依頼するような事例もあります。いずれにしても、大学の美術館として内容的に恥ずかしくないものを選別していかなければなりません。設立当初はタイミングやノウハウがうまくつかめず、集客はあったが内容的にはいかがなものかと、内容はよかったが人はあまり入らなかったといったことがありました。最近では広報を含めてバランスがとれるようになってきたと思います。

そうしたなかで私が最も印象に残っているのは、「ルーヴル美術館展—古代ギリシア芸術・神々の遺産—」展（二〇〇六年六月一七日〜八月二〇日）です。日本テレビのメセナ事業で、ルーヴル美術館の「モナ・リザ」の展示室の改築と、続いて「ミ



古田 亮（ふるた・りょう）

准教授—大学美術館

1964年東京生まれ。東京藝術大学美術学部卒業。

東京藝術大学大学院美術研究科修士課程芸術学専攻（日本・東洋美術史）修了。

東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻（芸術学）博士後期課程中退。

東京国立博物館美術課絵画室研究員、東京国立近代美術館主任研究官を歴任。

2006年より現職。

ロのヴィーナス」の展示室の改築を行うこととなり、改築のあいだ彫刻作品を収蔵庫に納めておくよりも、「ミロのヴィーナス」以外の彫刻であれば日本にお貸ししましょう、というところから始まった企画でした。ところが、ただルーヴルから彫刻を持ってきて「古代ギリシア彫刻展」と銘打っても、日本の西洋美術史の研究レベルはそんなに低くないですから、あまり意味がないと思ったのです。

そこでたまたま私がドイツの大学でギリシア陶器を副専攻にしていたということもあり、彫刻のほかに陶器も加えたテーマを設定し、本学ならではのテーマを持った展覧会となったのです。結果的にルーヴル側も非常におもしろいと評価してくれたのは、縦割りの組織となっているルーヴル美術館では、ありえない展示だったからなんです。

大石 「藝大とあそぼう」(本年七月四日)のチラシを持って来たのですが、主催のところに東京藝術大学音楽学部と東京藝術大学演奏芸術センターが併記されています。これは、奏楽堂で催される演奏会には二種類あつて、その主体によって表記が変わってくるのです。オペラや学生オーケストラの定期演奏会など音楽学部が主体の場合、主催の表記は東京藝術大学音楽学部が先に来ます。「藝大とあそぼう」のように、演奏芸術センターが企画、主導して制作するコンサートの場合は演奏芸術センターの表記が先に来るのです。音楽学部主催のコンサートは、学生たちの日ごろの教育研究成果を披露するという性格が強いわけですが、演奏芸術センターが主導しておこなうコン



大石 泰 (おおいし・ゆたか)

准教授—演奏芸術センター

1951年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。
テレビ朝日でテレビ番組、コンサートのプロデュース、構成演出を務める。
2004年より現職。

サートは、企画そのものにメッセージが込められているといった違いが両者にはあります。

演奏芸術センター主催の演奏会には三つの柱があり、一つめは「藝大の響き」というシリーズです。これは音楽学部の様々な専攻の垣根を取り払い、共同で演奏会を企画していくこうというものです。その最も端的なものが、作曲家を取り上げていく演奏会シリーズで、今年度はメンデルスゾーン、ヘンデル、ハイドンです。各科が作曲家の曲をさまざまな角度から取り上げて、全体として強いメッセージとして伝わっていくという仕組みの演奏会です。

二つめは「奏楽堂シリーズ」です。こちらは各科の独自性を打ち出していく演奏会で、たとえばオルガン、歌、管打楽器のシ

リーズなど、各専攻が自分たちならではの企画を前面に出していく演奏会シリーズとなっています。

三つめは「藝大21」で、これが演奏芸術センターの特色がいちばん強く出るシリーズとなっています。「いま」という時代を見つめて新しい試みに挑戦しており、「ジャズin藝大」やアジアに着目する「アジア・躍動する音たち」、現代音楽を紹介する「創造の杜」などのプログラムがあります。

もう一つ触れておきたいのがモーニングコンサートです。これは四十年近い歴史のあるもので、藝大フィルハーモニアというプロのオーケストラと選抜された優秀な学生が共演して、毎週ではないのですが、木曜日の午前中に約一時間のプログラムを無

料で提供するものです。これが最近はいへんな人気で、二〇〇八年度は一回の演奏会で、入場者の総数が初めて一万人を超えたんです。一回の平均入場者数が八一人ですから、非常に大きな集客力があります。

参加体験型演奏会の試み

大石 「藝大とあそぼう」について、私がこの名前に込めている意味は、「藝大」にはもちろん場所、施設の意味もありますが、そこには先生や学生もいるわけですが、そういったものすべてが「藝大とあそぼう」の「藝大」に込められているのです。とくに小中学生とその親を対象に、ほかの施設で行われているような形ではない「ファミリー・コンサート」を考えようと、毎年いろいろな工夫をしています。

今年初めての試みとなるのですが、音楽学部を開放して、一種のテーマパークをめざしました。奏楽堂だけではなくて、音楽学部の校舎内のホールや、教室も使用します。参加体験型の催しですから、子供たちが手づくりの楽器をつくって一緒にアンサンブルをしたり、そのような場をできるだけ多く設けたいと企画しました。

これからは、美術学部や映像研究科とも一緒にコラボレーションできるといいなと思っています。今回は時間的にも余裕がないなか、デザイン科の学生たちがつくったアニメーションを連続上映する部屋を用意することができました。

薩摩 大学美術館は、外側から見るとどうしても展覧会活動が中心と捉えられがちで

すが、それはあくまでも活動の一部なんです。コレクションの管理や修復、それに調査といった重要な仕事も日常的に行われているのです。そういう意味で美術館はかなり特殊な組織かもしれません。

大学美術館と奏楽堂による共同企画は難しいかもしれませんが、何か一緒にできないか考えていきたいですね。

大石 「パウハウス・デッサウ展」(二〇〇八年四月二六日〜七月二二日)のときのよう

古田 展示は二三年前から計画を進めているので、予定を合わせるの

松島 コンサートホールについて、私はよく「三位一体」という例えを使っている

「魂柱」という表板の振動を裏板に伝える重要な棒が入っています。弦楽器はこの魂柱と弦、弦を張る駒のバランスがよくない

そういう空間の原点はどこにあるのかと

いうと、オランジュのローマ劇場(南フランス、一世紀)やエピダウロスの円形劇場(ギリシア、紀元前四世紀)などです。どちらも野外劇場ですが、ステージから客席までの音の通りがすごくよい。この二つの劇場は「透過力がよい」と私は思うのですが、そうした空間のバランスをホールの音響設計で考えてほしいのです。音響設計の専門家は、「この空間は、残響何秒で音設計しています」とよくいうのですが、聴衆はそういう耳では聴いていないし、感じ

発信の場、 教育の場としての展望

古田 私は藝大の大学院を出たあと、東京

国立博物館で古美術を中心に扱ってました。その後東京国立近代美術館へ移り、現代美術を含む近代美術の展覧会を手掛けて、二〇〇六年に藝大に戻ってきたのです。働く場が変わるたびに美術館の規模がだんだん小さくなっているんですね(笑)。美術館や博物館は、規模によってお客さんとの関係が微妙に違います。たとえば東京国立博物館は日本国民全員を相手にするというイメージです。言い換えると、ひとりひとりのお客さんの顔が見えてこない。東京国立近代美術館のほうは、近代美術のファンとその周辺、あるいは現代作家と現代美術関連のサークルが少し見えるという感じなんです。

大学美術館は、藝大を見る窓口になっているかもしれませんが、一方で藝大を発信

していくための窓の役割も果たしています。単に藝大はこんなことをしていますというだけではなくて、教育機関として在学生のための高度な教育システムをつくっていく責務があります。その大きな前提のなかで美術館としての役割を果たしていくことが本来の形だと思うのです。大学美術館が、学生にとって美術館とはどうあるべきか、展示とはどうあるべきかという専門的な教育をしてもよいのではないのでしょうか。

さらに、芸術教育は学生にかぎった話ではないと発想すると、ほんとうに将来性があつて教育しなければいけないのは、藝大に入る前の年齢層になるわけですよ。たとえば「パウハウス・デッサウ展」は、そうした層が目立って多かつたんです。藝大をめざすというのではなくても、小・中学校・高校という裾野に対して、美術を見る楽しさを教える。それが結局、美術に興味を持つ層を広げ、そのなかから作家が生まれるということに繋がるのではないかと思うのです。

大石 音楽も全く同じだと思います。音楽学部は基本的にはクラシックを中心に教えています。当然のことながら音楽にはさまざまなジャンルがあつて、いろいろな楽しみ方があります。芸術性を高めて追求していくというのは本道として、それだけではないということはないと思うわけです。今後バラエティに富んだ企画を考えることが、いままさに演奏芸術センターに課されている役目だと認識しています。



松島 穆 (まつしま・きよし)

ステージマネージャー——演奏芸術センター
1942年新潟県佐渡生まれ。日本大学法学部卒業。
東京都交響楽団にステージマネージャーとして勤務。
ヨーロッパ各地の舞台環境を見聞するとともに、
東京都交響楽団の海外公演にもステージマネージャーとして参加。
1995年桐朋オーケストラ・アカデミーに赴任。
2004年より現職。

大学美術館

我が国に前例のない 学術的かつ実験的な美術館活動

関出

東京藝術大学大学美術館は本年、開館十周年を迎えました。創造の教育研究現場に位置する本学美術館は、所蔵品の保存修復、展示公開、調査研究、教育普及、及び企画展開催等々、通常の美術館業務とともに、実技系芸術大学における創作活動と社会との直接的な接点となる窓口として、その特性の發揮に全力を注いでいます。

歴代の指導者たちによる蒐集品は、指定文化財三二点を含む、二万八二五七点（平成二十一年五月現在）に達し、それらは美術工芸品に限らず、標本、資料類など多岐にわたり、例をみないコレクションを形成しています。芸術教育と研究のための「芸術資料」や「教材」は、収蔵の来歴とともに本学特有な内容であり、とりわけ学生制作品（美術八五三四点）や代々の教員作品は、格別な所蔵品となっています。

東京美術学校時代以来の陳列館（昭和四年）、正木記念館（昭和十年）、芸術資料館（昭和四十五年）、大学美術館取手館（平成六年）では、時

間経過のなかで一般公開のさまざまな展覧会が開催されてきましたが、その規模からは「広く社会に開く」までには至りませんでした。

そうした背景のなか、教育研究の成果を積極的に社会に公開することを目指し、平成十一年十月に大学美術館が開館しました。開館から現在までの入館者数累計は、約二七四万六〇〇〇人（平成二十一年三月現在）となり、広く社会に開かれた窓口となっています。

定例の「卒業・修了作品展」「博士審査展（平成十九年度）」「退任記念教員展」「芸大コレクション展」のほかに、毎年企画展が開催されてきましたが、なかでも「開館記念芸大美術館所蔵名品展」（平成十一年・三四万三〇〇〇）、「日本画の一〇〇年展」（平成十二年・二万八〇〇〇）、「ウィーン美術史美術館名品展」（平成十四年・一五万六〇〇〇）、「横山大観 海山十題展」（平成十六年・九万八〇〇〇）、「興福寺国宝展」（平成十六年・一〇万）、「ルーブル美術館展」（平成十



1948年神奈川県生まれ。
1972年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。74年東京藝術大学大学院美術研究科日本画修士課程修了。
1982年美術学部絵画科日本画専攻助手、83年講師、94年助教授、2001年教授。
2009年より大学美術館館長。

八年・二七万余）、「金刀比羅宮 書院の美」（平成十九年・一六万）などは、それぞれの内容とともに入館者数からも特筆される展覧会といえるでしょう。特に「ルーブル美術館展」は大きな反響を呼び、一日平均五〇〇〇人ほどが来学されたため、夏の暑さのなか、大学構内には長蛇の列ができるほどでした。

国立大学法人化（平成十六年）により、大学の社会貢献に関する実績が評価の対象としての比重を増しています。我が国に前例のない学術的かつ実験的な美術館活動は、本学が果たす役割への理解を深めるうえでも大変重要な位置を占めています。内外の大学博物館・美術館等との学術交流や情報交換などの連携協力を図り、一層の充実に向けて事にあたっていきたいと思います。さらなるご支援をお願いいたします。

（せき・いずる／大学美術館館長・美術学部教授）

奏楽堂

演奏家たちが世界へ 飛翔していく窓口

杉木峯夫

一八九〇（明治二十三）年、東京音楽学校校舎として建設された旧奏楽堂は、教育・研究成果発表の場としての重要な役割を果たし、数々の西洋伝統音楽の日本初演の場として使用されてきました。

一九八四（昭和五十九）年、老朽化による奏楽堂解体、上野公園内移築の後、コンサートホールとの不在を解消すべく、一九九八（平成十）年三月に新奏楽堂が建設されました。

新奏楽堂の設計にあたり、日本音楽界のシンボルとして後世に誇れるものであること、音楽教育・研究の場としての機能と音響効果を重視することが設計の理念とされました。特に音響特性においては、ホール全体が優れた楽器であるかのようには調和のとれた響きを生み出すこと、さまざまな演奏形態に対応できる残響効果が得られることを考慮した結果、世界で初めての可変式天井システムが採用されたのです。

奏楽堂の一年は入学式に始まり卒業式で終了し

ますが、その有効運用を目的に平成九年、東京藝術大学「演奏芸術センター」が設置されました。

当センターは、本学の特徴を活かした教育・研究の発展と充実の場、幅広い芸術文化の発信基地として、音楽・美術両学部を超え、現在社会が求める演奏芸術の創造、未来に向けた創造活動の研究・実践をおこなっています。

その企画は多岐にわたり、狭い紙面では紹介できませんが、「藝大の響き」（音楽学部各講座の枠を超えたインタラクティブな試み）、「奏楽堂シリーズ」（音楽学部各講座の専門性、独自性を活かしたコンサートシリーズ）、「藝大21」（広いパスベクトイブで〈今〉という時代を見つめる企画）、「芸術創造の杜」（現代音楽の夕べ）、「芸大と遊ぼう」（ようこそ！藝大ランドへ）、「学生公募企画公演」、「音楽学部主催コンサート」、奏楽堂トーク&コンサート「学長と語ろう」等々多種多様な演奏会をおこなっています。奏楽堂入場者数は年々増加傾向にあり、二〇〇八（平成二

十）年は六万一千三百一十名となっています。

東京音楽学校から東京藝術大学へと発展してきた百二十年余の歴史のなかで、旧奏楽堂及び新奏楽堂は、本学の社会に向けた窓口として大きな役割を果たしてきました。その一つはここから毎年多くの優れた演奏家たちが世界へ飛翔していったことです。今後はさらに窓を大きく開け放ち、さまざまな角度から見た演奏芸術の企画制作を行うことが求められています。この重要な施設を運営する「演奏芸術センター」の役割は重い。しかしフット・ワークは軽やかに、従来の活動はもとより社会的要請に応じて卒業生の演奏参加、アジアへの重点的芸術文化発信を視野に入れ、新たな展開を計っていきたいと考えています。

奏楽堂と演奏芸術センターが一層の発展を遂げ、世界の芸術文化交流、人的交流に寄与できますよう皆様のご理解・支援をお願いする次第です。（すきき・みねお／演奏芸術センター長・音楽学部教授）



1945年富山県生まれ。
1970年東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。
1972年パリ国立高等音楽院卒業後、パリ国立高等音楽院オーケストラ、国立リヨン管弦楽団、(財)札幌交響楽団等で演奏活動。
1986年東京藝術大学音楽学部器楽科助教授、2002年教授。
2009年より演奏芸術センター長。

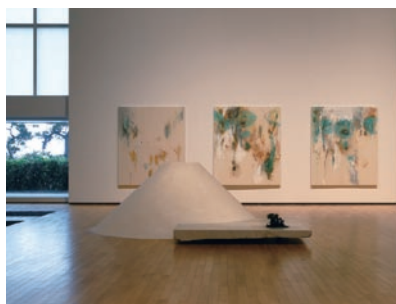
異界の風景

「創造の源泉」を
あらわにする試み

大学美術館において十月二日から十一月二十三日まで開催される「異界の風景」展は、美術学部絵画科油画専攻が企画する展覧会。現職教員一四名の作品約七〇点と大学美術館所蔵作品約一〇〇点によって構成されます。

本展は、作家であり現職教員である一四名が、自らの「風景Ⅱ眺め」をいかに見だし、描き、表現するか、表現したかを自作で示すとともに、各々の創作の立ち位置から大学美術館所蔵作品を選定し、自作とともに展示することにより、自作との関係を紡ぎ、各々に内在する「異界Ⅱ創造の源泉」をあらわにする試みでもあります。

油画専攻では、「異界の風景」を「創造行為が生まれる場の特徴をとらえた眺め」ととらえ、西洋の絵画を規範として展開してきた本専攻における芸術資料の参照展示と現在の作品を組み合わせた場を創造することにより、この展覧会が「異界の風景」として立ち現れることを願っています。



左：坂口寛敏《パスカル海—葉山》2007

右：浦上玉堂《青松丹壑図》19世紀



退任記念展 「絹谷幸二 原色の軌跡」 二十二年におよぶ教員生活の 最後の授業

各界との多岐にわたる交流を重ねるなど、広い視野で独自の世界を構築しつつ、後進の育成につとめてきた洋画家・絹谷幸二教授が、二十一年におよぶ東京藝術大学での教員生活に幕を下ろします。

その絹谷教授が、本学から巣立ちやがて教鞭を執るまでの軌跡を紹介する退任記念展「絹谷幸二 原色の軌跡」（仮題）が、二〇一〇（平成二十二年）年一月五日から十九日まで、同じ学舎である大学美術館において開催されます。

いわば東京藝術大学における最後の授業となる本展では、絹谷教授の若い時代の作品から代表作まで、さらには本展のために描く新作を加えた約五〇点が、知られざる体験談とともに紹介され、絹谷教授の教育者としての思想などを、学生だけではなく学内外のより多くの人々と共有することで、「生きた教育の場」の創出を目指します。

展覧会スケジュール（2009年9月～2010年3月）

大学美術館本館

異界の風景

10月2日（金）～11月23日（月・祝）

入場料 一般1,000円、高・大学生600円

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展

12月8日（火）～12月20日（日） 入場無料

退任記念展 絹谷幸二 原色の軌跡（仮題）

1月5日（火）～1月19日（火） 入場無料

まばゆい、がらんどろ

1月6日（水）～1月20日（水） 入場無料

Crest展（仮題）

1月6日（水）～1月20日（水） 入場無料

第58回東京藝術大学卒業・修了作品展

1月29日（金）～2月3日（水） 入場無料

陳列館

日本画第一研究室発表展

8月29日（土）～9月6日（日） 入場無料

時空をこえたオブティミスト

建築家Borek Sipekの軌跡と作品展

9月16日（水）～10月7日（水） 入場無料

現代芸術DRAWING展—景—

10月14日（水）～10月24日（土） 入場無料

キジル石窟壁画模写作品展（仮題）

*会期未定 3月中旬を予定

正木記念館

彫刻展示室（田中記念室）開室

10月31日（土）～11月23日（月・祝） 入場無料

※開館時間は、10:00～17:00（入館時間は16:30まで）。月曜日休館。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。なお、展覧会によっては、開館時間及び休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※展覧会についてのお問い合わせ先

ハローダイヤル Tel.03-5777-8600

大学美術館 Tel.050-5525-2200

※展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

岡山 潔 退任記念

コンサート

ベートーヴェンと
シューマンの室内楽三曲

ヴァイオリン奏者として室内楽を中心に意欲的な活動を行うとともに、本学では室内楽とヴァイオリン実技を担当し、幅広く学生たちの指導にあたってきた岡山潔教授が、二十年間の勤務を終え退任を迎えます。

その締めくくりとしての退任記念コンサートが、二〇一〇（平成二十二）年三月十三日、奏楽堂において開催されます。演奏されるのは、岡山教授が最も深く追究したベートーヴェン（ピアノとのソナタ、弦楽四重奏曲）。そして心から愛したシューマン（ピアノ三重奏曲）の三作品。ピアノの植田克己教授、伊藤恵准教授、チェロの河野文昭教授、山崎伸子教授ら素晴らしい共演者たちとともに室内楽の多彩な魅力を余すことなく紹介するプログラムが組まれています。

有終の美を飾るのは、これまでの演奏活動の集大成として昨年結成された岡山潔弦楽四重奏団によるベートーヴェンの「弦楽四重奏曲 嬰ハ短調 Op. 131」。

金 昌国 退任記念 コンサート

薫陶を受けた
奏者たちとの協演

フルート奏者として第一線で活躍するとともに、後進の指導にあたってきた金昌国教授が、本学における二十八年間の勤務を終え退任を迎えます。

その功績をたたえた退任記念コンサートが、金昌国とその藝大の生徒たちと銘打ち、二〇一〇（平成二十二）年三月十四日、奏楽堂において開催されます。コンサートに参加するのは、金教授より薫陶を受けた奏者たち。高木綾子やNHK交響楽団首席奏者の神田寛明など、現在音楽界でソリストやオーケストラ奏者として活躍する教え子たちのほぼ全員が集結し、フルートの華麗なソロ、アンサンブルを繰り広げます。

最後を飾るのは金教授とハープ奏者篠崎史子によるモーツァルトの「フルートとハープのための協奏曲」。金教授の万感の想いのこもった響きが繰り広げられます。

奏楽堂 演奏会スケジュール (2009年9月～2010年3月)

藝大プロジェクト2009 V ヘンデル没後250年記念コンサート・オペラ「アリオダンテ」
9月13日（日）15:00開演 3,000円（全席指定）
藝大21 和楽の美 邦楽で綴る「平家の物語」（後編）
9月16日（水）18:30開演 3,000円（全席指定）
木曜コンサート（木管・金管）
9月17日（木）旧東京音楽学校奏楽堂 14:00開演 500円（自由席）
藝大オペラ定期第55回 第1日
「モーツァルト：イドメネオ」
10月10日（土）14:00開演 3,000円（全席指定）
藝大オペラ定期第55回 第2日
「モーツァルト：イドメネオ」
10月11日（日）14:00開演 3,000円（全席指定）
木曜コンサート（古楽）
10月15日（木）旧東京音楽学校奏楽堂 14:00開演 500円（自由席）
藝大フィルハーモニア定期（第335回藝大定期）
「マラー：子供の不思議な角笛」他
10月23日（金）19:00開演 2,000円（自由席）
モーニング・コンサート 11
「平川加恵：風神～オーケストラのための」
「ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.77」
10月29日（木）11:00開演 無料（自由席、要整理券）
学生オーケストラ演奏会 Ⅲ
「チャイコフスキー：交響曲第6番 短調 悲愴 Op.74」他
10月30日（金）18:30開演 無料（自由席）
東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校
第21回定期演奏会
「J.S.バッハ：ミサ曲 長調 BWV236」
「メンデルスゾーン：交響曲第4番 イ長調 イタリア」他
10月31日（土）附属音楽高等学校 14:30開演
整理券または往復ハガキによる申し込み
アジア・躍動する音たち～ミャンマーの音楽家たち
11月1日（日）15:00開演 2,000円（自由席）

藝大プロジェクト2009 VI ハイドン没後200年～オーケストラ
11月7日（土）16:00開演 1,500円（自由席）
モーニング・コンサート12
11月12日（木）11:00開演 無料（自由席、要整理券）
藝大プロジェクト2009 VII ハイドン没後200年～室内楽
11月13・14日（金・土）旧東京音楽学校奏楽堂
18:30開演 2,000円（自由席）
学長と語ろうトーク&コンサートVI 水中カメラマン 中村征夫氏
11月14日（土）15:00開演 無料（全席指定）
藝大プロジェクト2009 VIII 藝大フィルハーモニア・合唱定期（第336回藝大定期）
「ハイドン：天地創造」
11月23日（月・祝）17:00開演 2,000円（自由席）
藝大吹奏楽定期（第75回）
11月25日（水）18:30開演 1,500円（自由席）
藝大プロジェクト2009 IX 藝大学生オーケストラ定期第41回（藝大定期第337回）
「メンデルスゾーン：劇付随音楽 真夏の夜の夢」
11月28日（土）15:00開演 1,500円（自由席）
藝大プロジェクト2009 X～うたシリーズ
「メンデルスゾーン：ファニー・メンデルスゾーンの歌曲」(予定)
11月29日（日）15:00開演 2,000円（自由席）
弦楽シリーズ
11月30日（月）19:00開演 2,000円（自由席）
邦楽定期演奏会第76回
12月1日（火）17:30開演 2,000円（自由席）
モーニング・コンサート13
2月4日（木）11:00開演 無料（自由席、要整理券）
藝大室内楽定期第36回
2月6・7日（土・日）15:00開演 1,500円（自由席）
モーニング・コンサート14
2月18日（木）11:00開演 無料（自由席、要整理券）

藝大チェンバーオーケストラ定期第14回
2月20日（土）16:00開演 1,500円（自由席）
管打楽器シリーズ
2月21日（日）15:00開演 2,000円（自由席）
岡山 潔退任記念コンサート
3月13日（土）16:00開演 無料
金 昌国退任記念コンサート
3月14日（日）15:00開演（予定） 無料

※特にお断りのないコンサートの会場は、すべて本学構内の奏楽堂です。
詳細につきましては、9月発行の「平成21年度コンサート・スケジュール（後期版）」をご覧ください。
※平成21年7月31日現在の予定表です。今後、演奏会内容、日程等については、変更することがございます。
※演奏会の曲目、開演時間等の詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。
<http://www.geidai.ac.jp/>
※本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。
※チケットの取り扱い
ヴォートル・チケットセンター TEL：03-5355-1280
チケットびあ TEL：0570-02-9999
（一部携帯電話と全社PHSはご利用いただくことができます。）
藝大アートプラザ TEL：050-5525-2102
東京文化会館チケットサービス TEL：03-5685-0650
※上記演奏会のほか「学内演奏会」の日程については、下記までお問い合わせください。
※演奏会についてのお問い合わせ先
演奏芸術センター TEL：050-5525-2300
音楽学部附属音楽高等学校 TEL：050-5525-2406

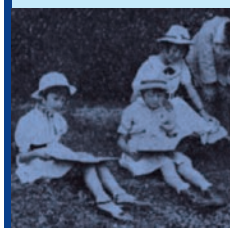
上野の杜の 波瀾万丈

第八回

上野児童音楽学園

昭和初期から戦時中にかけておこなわれた
東京音楽学校の早期教育機関、上野児童音楽学園。
短くも先駆的だった「学園」の知られざる歴史。

橋本久美子



上：第1回卒業式 昭和11年3月18日 74名が3年間の課程を終えた
下：伊澤修二初代校長の胸像前で

報』第一八二号 昭和七年四月）、またベルリンの少年合唱でも「その可憐さと、清澄な声とは如何に余に深い感動を与へた事であろう」（同）。

帰国後の校長はさっそく早期教育に着手し、昭和八（一九三三）年六月に上野児童音楽学園を開園した。ちようど東京音楽学校卒業生でパリから帰国した園田清秀が長男・高弘に絶対音感教育を始めた頃であった。当時の『同声会報』に学園案内が掲載されている。

「名称」上野児童音楽学園。目的「児童に音楽教育を施す。設立者」東京音楽学校同声会。修業年限「三カ年。職員」園長—東京音楽学校校長、教員—東京音楽学校教官。入園資格「現に小学校に通学する第四学年以上」の男女児にして音楽的趣味を有するもの。」「（*同声会は同校同窓会の名称。*後三年生でも入園可能となった。）

入園テストは唱歌を歌い、弾ける曲を弾く程度でよかった。しかし学園の情報を得ることのできた家庭自体が限られており、実際には東京音楽学校卒業生の子女もしくは何らかの伝手のあるケースが多かった。水曜と土曜の放課後に週二回、遠くは鎌倉から、教育熱心な家庭の子供たちが音楽学校に集まった。

主科目の唱歌は「基本練習、単音唱歌、輪唱歌、重音唱歌、音声陶冶、鑑賞指導、即興創作」である。ピアノ、ヴァイオリン、チェロ等の兼修者が同じ課題曲で互いのレッスンを聴き合う切磋琢磨も、巷の個人レッスンでは得がたい環境であった。当時の児童たちの記憶には、コールユーブンゲンや楽典、校庭の芝生で講師や友人と遊んだ休み時間、通学路の風景が、今も

焼きついている。

昭和十一（一九三六）年には設立者を財団法人音楽会館（理事長「乗杉」とし、高等科四年、さらに十五年には研究科一年が新設された。

園長の乗杉について、音楽界では文部省の役人として知られる程度であるが、彼は近代日本の社会教育論の主唱者とされる人物で、図書館司書や博物館学芸員



第83回定期演奏会のバッハ作曲《馬太受難楽》日本初演 昭和12年6月19日、日比谷公会堂 クラウス・プリングスハイム指揮、管絃楽約90名、音楽学校生徒200名と児童200名による合唱

本学の音楽学部附属音楽高等学校は昭和二十九（一九五四）年四月に設置され、音楽の早期教育機関の一つとして今日に至っている。しかし、すでに昭和戦前期の東京音楽学校に上野児童音楽学園という機関があり、十一年半にわたり、全国に先駆けて早期教育が実践されていたことはあまり知られていないのではないだろうか。

学園設立の機縁は、昭和六（一九三二）年秋の乗杉嘉壽校長のヨーロッパ視察である。彼は欧米各国の音楽学校のレッスンや学生オーケストラはもとより、子供たちの演奏にも驚嘆した。たとえばパリ・コンセルヴァトワールのレッスンでは「十五六歳の少女がベートーヴェンのコンツェルトを暗譜で堂々と弾いてゐる有様は誠に驚くべきもので、譜を見なければ一寸先も歩けぬといふのとは大分距離がある」（『同声会

の基礎を整え、文部省初代社会教育課長を務め、「油のりすぎ」の異名をとった。東京音楽学校の乗杉校長時代は、戦後日本の自信喪失と価値観の揺らぎのなかで封印されてきたが、国と学校の将来を見据えた斬新な運営は、今なお学び得る点が多い。

さて初年度は募集四十名に対して四倍強の応募があり、「非音楽的でないものは出来るだけ之を許可」し、百十八名を入園させた。梅、桃、桜の三クラスを声楽教師の他、本科と師範科最高学年の生徒数名が教生として担当した。学園は東京音楽学校の教育実習機関でもあった。講師は五十音順に、浅野千鶴子、石澤秀子、伊藤武雄、今井治郎、太田綾、小田雪江、片山頼太郎、川上きよ、川口軽六、城多又兵衛、木下保、呉泰次郎、澤崎定之、柴田陸、蘭田誠一、谷康子、戸狩伸一、永井進、永田晴、貫名美名彦、野呂愛子、橋本秀次、平原壽恵子、福井輝子、宮内鎮代子、三宅洋一郎等多数、昭和十一年にはヴァイオリンのウィリー・フライも加わった。学園に関する記録は断片的で、今回も関係者にご協力頂いたが、今なお資料収集中である。

学園は男児合唱団も結成した。まず尋常小学校三年生百名を集め、次に五十名増員し、さらに音楽学校近隣の小学校に呼びかけた。目指すは東京音楽学校男生徒との大合唱で、城多、澤崎、蘭田等、当時の声楽・合唱指揮の第一人者が指導に当たった。しかし器楽を嗜まない男児集団には苦戦し、二年後には解体して希望者を学園に編入させたが、その人数はわずか二十七名であった。

学費は月二円、楽器兼修者は五円であった。昭和八年の東京音楽学校の授業料は予科、本科とも年八十円、専門実技のみ教える選科は一科目につき年五十円であり、学園の学費は、概ね良心的と受けとめられた。男児合唱団は無料であった。東京ではコーヒ―、うどん、そばが十銭、新宿中村屋のカリ―が八十銭の時代であ

る（森永卓郎著『物価の文化史事典』二〇〇八）。

上野児童音楽学園の合唱は、皇后陛下行啓演奏会の《皇太子殿下御誕生奉祝歌》、ベルリン・オリンピック対独放送《征けよ伯林》、北原白秋作詞・信時潔作曲《海道東征》の他、東京音楽学校定期演奏会にも出演した。昭和十（一九三五）年のマラー《第三交響曲》初演では、プリングスハイムのドイツ語の猛特訓で暗譜し、「子供の合唱がいちばんうまかった」（太田黒元雄）等、批評家の賛辞を独占した。十一年のベリオリオーズ《ファウストの劫罰》、十二年のバッハ《マタイ受難曲》でも好評を得た。児童合唱の声をSPレコードに録音した《海道東征》と《国民学校の歌》は近年CDに復刻されている。

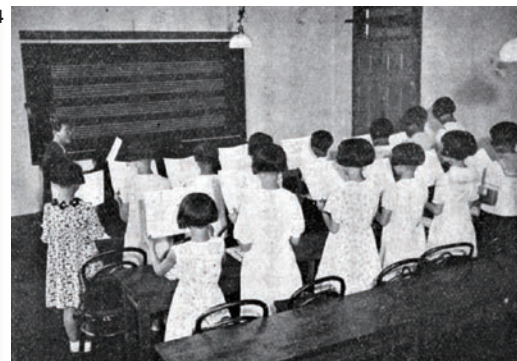
昭和十一年の高等科には砂原美智子、中田喜直（父・章は《早春賦》の作曲者）、林路子等の名前が見える。我が国を代表するピアニストの一人となる園田高弘も父の早世後入園し、学園の申し子のような存在となった。昭和十四年、園田はバッハ《イタリヤ協奏曲》、中田はベートーヴェン《ソナタ変ホ長調》を弾いた。学園の出身者は前出の他、青山三郎、笠間春子、高良芳枝、田辺緑、土淵るり子、名越史子、萩原和子等、戦後の音楽界を支える人材を多数輩出した。

昭和十五（一九四〇）年には箏曲科を設けて邦楽の早期教育にも乗り出した。同年の児童数は四百九十四名（内男児四十四名）、講師は九十四名に達した。しかし昭和十六年頃から学校内に防空壕が掘られ、上野公園の噴水付近は高射砲の陣地となり、児童や講師も疎開を始め、十九年秋にやむなく閉鎖された。戦後に復活しなかったことを惜しむ声は多い。とはいえ昭和八年当時でも、官立学校が同窓会を設立者として学園経営を行ったこと自体、異例の乗杉流だったのだろう。

（はしもと・くみこ／音楽学部講師）



乗杉園長を囲む児童たち



クラス授業

写真はすべて『同声会報』より。1＝昭和11年3月、2＝同12年9月、3＝同12年6月、4＝同12年6月、5＝同12年2月

次号予告

教官総辞職 昭和十九年

第二次大戦末期の昭和十九年春、文部省は東京美術学校教官全員に白紙辞表を提出させ、教官を入れ替えて新たな指導体制を作った。その体制のまま大学昇格を迎えた。改革の意味、結果と戦中の校内の状況を記す。

Interview with the **Brilliant** **S**tudents

受賞学生インタビュー

藝大に在学している学生たちは、多くの公募展やコンクールで栄誉ある賞を受けている。受賞学生たちが賞にいたる努力とさらなる意欲を語る。

第2回

櫻井稔

◆大学院美術研究科修士課程(デザイン専攻)一年

情報処理推進機構
「未踏ソフトウェア創造事業(未踏ユース)」
天才プログラマー／スーパークリエイター認定



(Sequential Graphics) 「獅子」

父 が藝大卒のデザイナー、母が藝大卒のヴァイオリニストだったので、小さいころは、ヴァイオリンを習ったり、父のデザイン事務所で遊ぶような子供でした。残念ながらヴァイオリンには向いていませんでしたが(笑)。小学校に入ると運命的な出会いが待っていました。先生が旧式のコンピュータを廊下に並べて自由に

使わせてくれたんです。すぐにのめり込み、中学校でもコンピュータ部に入りクラブ活動に没頭しました。中学生のころはまだインターネットも普及していなかった時代でしたが、電話回線を利用して多人数でコミュニケーションが取れる掲示板サービスをつくって提供していたんです。やがてインターネットが普及するとサービスの規模が大きくなり、

一日数万人のユーザーが訪れるようになるなど、成長していく環境を提供すること、箱のなかで何かが勝手に書き換わるといったことにおもしろ味を感じていました。高校時代には藝大進学のため予備校に通ったのですが、親から受験勉強にコンピュータは不要だと撤去されてしまったんです。そこでベッドの下に自分で組み立てた基盤を隠し、テレビにつなげてこっそり遊んでいましたね。藝大には四浪の末に入学しました。浪人時代は昼に絵を描き、夜はコンピュータで遊ぶという生活を送っていました。一方で、なぜ自分はコンピュータをしながら絵を描いているのだろうという疑問が湧いてきたのです。しかし、平面、立体、写真やデザインというのは、あくまでも感動を伝えるための手法であって、それをコンピュータで伝えるのもおもしろいのではないかと考えるようになりました。そうした思いを抱きながら藝大に入学したところ、先端芸術表現科の共通科目に「ネットワーク表現演習」という授業を見つけたんです。

(独) 産業技術総合研究所の研究員である江渡浩一郎氏が講師をしていて、ネットワークとプログラムをそこで初めて本格的に学びました。その方に誘われて研究所のスタッフとしても働くことになり、そこで様々な技術を修得しました。今回「スーパークリエイター」の認定対象になったのは、**勢い**を描画する、**臨場感**を描画する、**ソフト**なんです。「心景」といって、例えば子供が心のなかでみた勢いを、静止画では残すことができないですね。そういった心で思い描いた筆の勢いを画面に残せないかという発想から生まれたのが、**Sequential Graphics**というペイントソフトウェアなんです。僕の場合、会社を興し藝大以外での活動も始めていますが、藝大では「ものを創るとは何か、ものを感じるとは何か」という表現において最も本質的な部分を学んでいます。表層的な技術は実務の現場でも身につけることはできるのですが、僕にとってブレてはならない軸となる部分は、藝大でしか学ぶことができませんから。



さくurai・みのる
1982年東京生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。2008年に株式会社「Fillot」を設立。
<http://www.fillot.jp/>

岩下晶子

◆大学院音楽研究科博士後期課程(音楽専攻「声楽」)二年

第七十七回日本音楽コンクール声楽部門第一位・
同パナソニック賞受賞

日

本音楽コンクールでは、
ネッド・ローレム(一
九二三〜)というアメ

リカの現代作曲家の曲を選んで歌いました。アメリカ歌曲というのは、クラシック音楽の世界でもあまりよく知られているとはいえないのですが、私はこだわりのもって取り組んでいるのです。ローレムの音楽も、彼の文学に対する造詣の深さから、難解な歌詞も多く、理解し咀嚼するのは苦勞するのですが、それだけに取り組み甲斐があります。

私は国立音楽大学で音楽教育を学んだあと、東京混声合唱団で八年間合唱歌手として活動していました。演奏会でソロのパートを任されるこ

ともあったのですが、合唱のプロとして、歌というものを総合的にトレーニングしていないと感じて、藝大の大学院に入り直すことにしました。ですから、当初は独唱歌手をめざしたというよりも、合唱団の一員として、自分がしっかりとした音楽を持つことで周りによい影響を与えて、合唱をさらに豊かで深いものにしたと考えていたんです。自分自身がのびのびと音楽を楽しむために

は、まず自分を磨かないといけないというのが、大きな理由だったので

す。
藝大大学院の声楽専攻には、国別に分かれた演習形式の講義があり、修士の学位取得のためにどの国の歌曲を選ぶかとても迷いました。最終的に選んだ英米歌曲は、近現代的な要素が強い作品が多く、聴衆の皆さんに楽しんでいただくためには十分に歌いこむ必要があるのです。もともとミュージカルなどとおして英語の歌には親しんでいたのですが、実際に学んでみるまで英米の歌曲がこんなに豊かだということを知りませんでした。

日本音楽コンクールの本選ではいままでにない集中力で歌いきることができたので、それだけで満足だったのですが、一位までいただくことができました。このことは、英語の歌曲をクラシックの歌曲として認めてもらえたという喜びとともに、英語の歌曲が新鮮だったことが受賞できた理由かもしれないと感じています。

大学院では、去年はコープランドの連作歌曲、今年はバーバーを研究

対象にしています。アメリカ歌曲、イギリス歌曲のなかにもまだまだ知らない曲が多いので、これからも視野を広げていきたいですね。

九月から二年間、ニューヨークの

マネス音楽院に留学することが決まっています。言葉をしっかりと身につけたいですし、ローレムさんにもぜひ会いに行きたいと思っています。



第77回日本音楽コンクール(2008年10月)本選での歌唱 ©毎日新聞社提供



いわした・しょうこ

1975年静岡県生まれ。国立音楽大学音楽教育学科音楽教育専攻卒業。企業組合東京混声合唱団入団。同合唱団退団後、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程(声楽専攻)入学。2008年同大学院修士課程修了。これまでに、吉沢哲夫、小島聖史、佐藤ひさら、朝倉蒼生、永井和子、Ruth Falconの各氏に師事。

森永泰弘

◆大学院映像研究科博士後期課程（映像メディア学専攻）三年

第六十二回カンヌ国際映画祭・監督週間部門
「カメラ・ドール賞」候補作品（音響監督担当）



海辺でのフィールド・レコーディング

僕

の表現活動のスタートはダンスだったんです。クラシカルなものからストリート系、即興性が高いモダンダンスまで幅広く取り組んでいました。

そんななかで僕が好きだったマース・カニングハムとも関係が深い、現代作曲家のジョン・ケージを知ったことなどをきっかけにして、「音（sound）」への興味が芽生えてきたのです。「音に合わせて踊る」ということの非日常性に対する疑問に始まり、人間は日常的に「音をどのように使って生きているのだろうか」という方向に、関心が引き寄せられていきました。

僕のふだんの活動は映画だけにとどまらず、自然の音や街の音を蒐集する「フィールド・レコーディング」から、インスタレーション、モダンダンスに音をつけるといったことまで、メディアを問わず多岐にわたっています。

一応の肩書は「サウンド・デザイナー」



映画「KARAOKE」（クリス・ジョン・チャンフィ監督）のポスター

「ナ」ということになるのですが、サウンド・デザインというジャンル自体が、日本ではまだ馴染みがないものでしょう。この概念は、国によっても意味合いが異なり、音楽の編集や効果音の製作を「サウンド・デザイン」と呼ぶ場合もあるようです。ですから僕は肩書きにこだわるつもりはなくて、音に関わることで自分がおもしろいと思うことならなんでも挑戦するというスタンスをとっています。

今回カンヌ映画祭の「カメラ・ドール」にノミネートされた「KARAOKE」の監督、クリス・ジョン・チャンフィとは、二〇〇六年に釜山国際映画祭で初めて出会いました。そのときに日本人とマレーシア人という違いを越えて意気投合したのですが、翌年のベルリン国際映画祭のワークショップでも偶然再会したのです。クリスはちょうど「Block B」という、集合住宅をモチーフにした短編作品を撮ろうとしていた時期で、彼から「音が重要な

作品になる」と声をかけられコラボレートすることになったのです。この作品はトロント国際映画祭やアルゼンチンのマル・デル・プラタ国際映画祭等で大きな賞を受賞するなど評価を受けました。

「KARAOKE」のほうは長編で、マレーシア人の青年がカラオケ・ビデオの主役に抜擢されるまでを描いた物語に、音の「質感」というものを強く意識して音響設計を施しています。

藝大では、藤幡正樹先生について、自分がなぜこういう表現をするのか、なぜこういうメディアを使うのかといった、「心」の問題について学んでいるところです。いま様々なメディアが交錯して、映画・美術・音楽といった従来あったジャンルの垣根がなくなっている状況だと思うのです。だからこそ、偏った考え方に傾くことなく、自由であるとともに確固とした信念に基づいて、活動を続けていきたいのです。



もりなが・やすひろ
1980年東京生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科修士課程（映画専攻）を第一期生として修了後、現在は同大博士後期課程在籍。

教員は語る

第十一回

―藝大への期待・抱負・提言―

美術学部絵画科 准教授

O J U N (齊藤潤)

野口千代光

演奏芸術センター 准教授

進化するキャンパス、 変わらぬ氣質

齊藤 藝大の大学院を修了してから、スペインやドイツに滞在したあと、一九九九年から非常勤講師として三年間、取手校地で一年生を見ていました。

今年から上野で勤めることになったのですが、私の学生時代と比べるとたしかに外的な変化は大きいと思います。大学の設備もそうですし、新しい学科や大学院が立ち上がり、集まってくる学生のめざすところにも変化があるでしょう。ただ学生の氣質でいえば、僕の時代はコンピュータやインターネットというツールがまだなかったという大きな違いはありますが、内的な部分は変わらないような気がします。美術の世界も様変わりしてきてはいますが、美術を志す思いや熱中する姿勢に関しては意外と素朴で、僕らのころとかなり重なるように見えますね。

野口 藝高と学部の間を過ごしたのですが、学部の途中で二年間休学して、ニューヨークのジュリアード音楽院に留学していました。藝大ではこれまで学生として過ごしただけで、教鞭を執ったことはなかったこともあって、教える子と学生のころの自分を重ね合わせる

せてしまう部分があります。自分なりに一生懸命日々を過ごし、音楽に賭けていたという点では、いまの学生たちも同じだと思います。

施設面では新しい演奏堂ができたことが最大の変化ですね。私は藝大フィルハーモニア（藝大に所属するプロのオーケストラ）のコンサートマスターも務めているため、選ばれた学生と協演したり、作曲科の学生がつくった新曲を演奏する機会があるのです。そうした演奏会を音響設備が充実した学内の施設でできるのは素晴らしいことですし、しかも練習の段階から使えるというのは学生にとってもほんとうに貴重で贅沢な経験だと思っています。私自身にとっても、教えることとともに、学生と一緒に演奏していくという仕事も任されて、毎日が真剣勝負だと感じています。

海外での芸術体験

齊藤 スペインのバルセロナに滞在したのは大学を卒業してすぐの時期で、私にとって初めての海外でした。なぜスペインを選んだかというと、ガウディの建築に興味を持っていたので、バルセロナを中心にスペイン全土に建っている彼の作品を見ることが目的だったのです。一年足らずのあいだにスペインの各地を回った

のですが、絵画の制作はほとんどしませんでした。

三十代前半にこんどはドイツに渡りました。デュッセルドルフでアーティストビザがとれたので、そこに滞在することにしたんです。デュッセルドルフは経済都市で、ヨーロッパのなかでは比較的新しい街なのですが「クンスト・アカデミー」というすばらしい美術大学があります。このアカデミーには、ドイツの国内外で活動している錚々たる巨匠が教授陣として名を連ねていて、世界中から学生たちが集まってくるのです。東京のように大きな都市ではないですが、大学のなかだけではなくその周囲まで熱気が漲っているですね。

ちょうどベルリンの壁が崩壊した翌年に訪れたものですから、経済的にも政治的にも、また芸術に関して面白いへん脈やかな時代で、おもしろい体験をいくつもさせてもらいました。私自身はアカデミーと直接関係を持っていなかったのですが、日本から作家が来たと聞きつけると、みんな様子を見にくるんですね。

ヨーロッパの中央部に位置するという地理的条件もあって、作家同士の交流が刺激のかつ濃密だったというのが強い印象として残っています。

野口 ジュリアード音楽院に留学していた二年間は、



O JUN[FUDOUNOCO]



O JUN（齊藤 潤）
美術学部絵画科——准教授

一九五六年東京に生まれる。
一九八〇年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。八二年同大学院美術研究科修士課程絵画専攻修了。
一九八四年～八五年スペイン（バルセロナ）に滞在。
一九九〇年～九四年ドイツ（デュッセルドルフ）に滞在。
一九九九年～二〇〇一年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻非常勤講師。
東京造形大学絵画科特任教授、女子美術大学非常勤講師を経て二〇〇九年より現職。

かが演奏をするとき、みんなそれぞれに対してコメントするんですね。いちばん驚いたのは私の憧れだったギル・シャハムと同じクラスになって、目の前で弾いてくれたことです。英語が流暢に話せないときだったこともあって「どうだった」とギルに聞かれて、間近での演奏のあまりのすばらしさに衝撃を受け、純粋に「すばらしい」という以外、言葉が見つからなかったんです。

すると先生から「あなたが同じ曲を演奏したら、全く同じには弾かないでしょう。ここところはこう思うとか、こういう部分は私と違うとか、そういうコメントはないの」と言われて、私はびつくりしてしまいました。

私のコメントの番はそれで終わったんですが、次の人があのギル・シャハムに向かって、「最初の音はノンビブラートから少しビブラートを増やして、こういうふうな弓のスピードを使って……」という注文をつけるんです。ギルがそんなコメントをどういうふうに受けとめるのかと思ったら「じゃあ試してみます。自分に自信がある人は他人からの意見もきちんと聞けるし、そこから選んでまた自分のものにできる許容量があるということがわかって、すごくそれは強烈な体験でした。日本の学生が他人の演奏に対して、何か注文をつけることはまずないですよ。」

私は日本に戻ってから前任の大学で同じようなことを実践してみたいです。するとなかなか最初は発言ができない。うまいか下手か、音程がいいか悪いか、ミ

スするかしないか、くらいしか言えないんです。イメージが乏しくて、そこから広がっていかない。日本にいたときは、この曲はこう弾かなければいけないという既成の概念みたいなものに縛られていたのですが、ニューヨークに行ったことで、自分のなかの引き出しを増やすことができたのではないかと思います。

スプリングボードとしての大学教育

齊藤 自分の表現に対して自分の言葉でそれを伝えるという訓練は、ヨーロッパでもかなり進んでいるという印象を私も持ちました。

ドイツに滞在していたとき、講評会に立ち会うという機会があったのですが、日本とは全くシステムが違います。教授にもよるらしいのですが、学生が自分の作品を前に展示して、それに対して自由にディスカッションをする。作品をただ見せるだけではなくて、どうしてこういうものをつくったのかを自分の言葉で伝えなければいけないし、それに対して他の人も反応しなければいけない。自分のみならず他人の仕事も言語化するということは、いずれ社会に出て行ったときに、大きなアドバンテージになると思うんです。

また入試のシステムもかなり違ってました。藝大も含めて日本の美術大学では、入試の期間に学生が集まって、現場で絵を描いたりする実技の試験があるわけですね。ドイツの場合は「マップ」という規定のフォーマットがあって、二十ページや三十ページのなかにドローイングやエスキースを挟んで提出するんで

ほんとうにあつという間のことでした。当時は超一流の演奏家がニューヨークに集まってきて、ドロシー・ダイレイ先生という名教授が教えているジュリアードに習いに来ていたんです。すでにCDデビューしているような演奏家が学生として来ていて、そういう人を間近で見ただけでもとにかく刺激になりました。日本の音楽大学と教育的な意味で決定的に違うのは、初めてレッスンを受ける曲でもほぼでき上がっている状態であることが求められ、その演奏家に対して仕上げの味つけをして、世のなかに送り出していくといった機会なんですね。日本の場合、ある意味システムマティックで、あまりはみ出たことは教えないと思うのですが、ジュリアードでは自分の色をどういうふうに表示するかを学ぶという教育でした。

大きくマスタークラスとレッスンに分かれていて、マスタークラスのほうは数人の学生が集まって、だれ

す。それをすべての教授が見て、可否を判断する。

それはどういうことかというところ、ふだんこの学生はこういうことをやっているのか、あるいは何を考えているのかを、油絵のような作品ではなくて、紙にペンやクレヨンで描いたドローイングやエスキースといった比較的簡素な素材から判断しようということなんです。こういった試験を通じてきた学生は、作家意識が生まれるのも早いんですね。日本でも美術学生の意識はだいぶ変わってはいきましたけれども、その辺りはまだ随分違うのかなという気はしますね。

一方で、学生をどう刺激していくか、閉じた意識をどのように外部に解放させていくかというのも教育現場の仕事だと思うんです。私の場合、現在活躍中の作家の方に藝大に来ていただいて、その肉声を学生に伝えたいということで、「この人の声に応答せよ」というシリーズを開講しています。たとえば作家の方の制作におよんだ話というのは、かなり抽象的にもなりまじし、観念的なところも出てくる。ただ、そういうものを学生が聞いてその場で理解できなくても、経験値を積んで成長していったときに、かつて聞いた言ったりした言葉が急に響いてきたりすることがある。それもやはり教育ならではの効果だと思うんです。表現の世界というのは時間をかけてでき上がっていくものから、そういった作家の肉声を自分のなかに落としこんで、響かせていけるようなゼミや授業を考えていきたいですね。

たものでは人に感動を伝えることができないんですね。楽譜からできるだけ多くの情報を読み取りしつかりとした計画性を持って表現方法を考え、そこに自分の感情が加わらないことには、共感を得られません。私がレッスンをつけるときも、ここをこうしてというのではなくて、どうしたいかをまず聞いてからそのものになる裏づけを楽譜上から探す作業を学生とともにすること、より説得力のある表現を追究していききたいと思っています。

作家意識ということでは、大学生活において演奏活動というのは、まだかぎられた形態なんですね。

練習を必死にやるとしても、それは試験のためであったり、コンクールのためであったり、そういった現実の目標に向かってのことなんです。私の場合も、卒業してお仕事をいただくようになってから、オーケストラでの演奏もあれば室内楽もあるといったなかで、その都度異なるすばらしい指揮者や演奏家との演奏機会が自分の音楽観をさらに豊かにし、常に勉強を続けている状態であるので、大学時代はその基礎固めみたいなところだと思っております。逆にいえば、大学時代にもっといろいろなことができたんじゃないかと思ひますし、一方では基礎的なことがあったから卒業後のいろいろな出会いが自分の経験値となっていたのかもしれない。

齊藤 大学というのはスプリングボードのようなもので、そこから飛び跳ねて外へ出て行き、さらにそこで叩かれるような経験をして、やがて作家になつていく

ものだと思うんです。自分のことに照らしめても、決して優等生ではなかったというのが正直なところなんです。そういう人間がいまでは教員をやっているわけですから、反面教師として、僕の背中を見て育ちなさいと学生たちには言っています。ただ大学は、それぞれの学生をある許容範囲のなかで大きく眺めて、引き受けてくれるような場所でもあります。芸術大学というのは、懐を深くして、学生たちのよきスプリングボードになり、ロケットの発射台のような役割を果たすべきではないかと思うのです。



野口千代光
演奏芸術センター——准教授

一九七〇年東京生まれ。

一九八九年東京藝術大学音楽学部器楽科弦管打楽器専攻（ヴァイオリン）入学。

一九九一年東京藝術大学を休学しニューヨーク・ジュリアード音楽院入学。

一九九二年ジュリアード音楽院サティ・フィケートコース卒業後、東京藝術大学に復学。

一九九五年東京藝術大学音楽学部器楽科を首席卒業。

桐朋学園芸術短期大学准教授を経て二〇〇九年から現職。



リサイタルシリーズ「B→C」
(2003年9月30日 東京オペラシティ・リサイタルホール)



大学会館内にあるキャッスル食堂

藝大の歩き方

ー上野の杜のキャンパスガイドー

第11回★学生食堂

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る藝大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。

キャッスル食堂 洋食の老舗の味が自慢

福本豊

一九三六（昭和十一）年の四月一日に開業してから、もう七十年以上の歴史になります。いまはテニスコートになっている、当時の旧奏楽堂の真下に最初の店がありました。そのころは風紀上、男女の入り口が分かれていて、各三十席ほどの小さな食堂だったようです。うちの前に「金亀食堂」という和食を出す店が入っていたのですが、当時の校長さんが「音楽学校の先生には外国の方がいらつしやるし、留学経験をしてきた先生も多いので、ぜひ洋食を供したい」ということで、丸ビルの一階にあった「キャッスル」に白羽の矢が立ったのです。

戦後は学生さんが一挙に増えたので、増築しながら営業していました。一九五五（昭和三十）年ころには、裏門を入ったところにあつた女子寮の隣りに移転。一九七八（昭和五十三）年からずっと、いまの大学会館での営業を続けています。使っているテーブルも椅子も当時のまま。料理の価格も十円あがつただけなんです。

「キャッスル」は、もともと伝統的なアメリカン料理を提供する老舗レストランで、藝大のこの店もソースはすべてオリジナルです。（ハンバーグ）（カツレツ）（オムレツ）も実は「キャッスル」発祥の言葉なんです。

メニューは季節によって変えていきますし、試験の時期には消化のよいもの

を出すようにしています。お米はササニシキを使っていますし、付け合わせのキャベツも量が多く、シャキシャキとした食感が好評です。

いちばんの人気メニューはやはり、午前十一時からお出ししている「盛り合わせ」ですね。曜日によって内容が変わり、麻婆豆腐や芙蓉蟹といった中華がつく日もあります。なかでもスパゲッティとチキンカツを盛り合わせた金曜日は、お昼をすぎると品切れになる日もあるほど人気が高いですよ。

（ふくもと・ゆたか／キャッスル食堂店主）



上：キャッスル食堂外観
下：喫茶室



「盛り合わせ」¥510

大浦食堂

偶然生まれた人気メニュー「バター井」

北澤悦雄

うちの食堂のいちばんのお薦めメニューは、なんといっても「バター井」ですね。「豆腐のバター焼き」が正しい名前で、いまは井で供しています。もともとはご飯を別に盛った定食だったんですよ。昭和五十年ころに、当時「藝祭」の実行委員長を務めていた松本君という学生が、ご飯にぶっかけて食べてみたらいへん美味しかったことから、店のほうでも井で出すようになったんです。ですから、もって古い卒業生の方から「豆腐のバター焼き」を頼まれたときには、いまでもご飯を別にしてお出ししているんですよ。

食堂は一九三七（昭和十二）年に、

先代の大浦英一が生徒集会所の建物を利用して営業を開始しました。当時は周囲に梅の林があったことから「梅林食堂」と呼ばれていたようです。戦争の混乱で梅林食堂は閉店を余儀なくされ、戦後戻ってきたときには別の人が同じ名前で食堂を始めていたそうです。そこで先代は大黒天（護国院）の側に新たに食堂を開き、姓をとって「大浦食堂」と名付けたんです。一時期は梅林食堂の建物で、二つの食堂がともに営業していたこともあります。一九六二（昭和三十七）年に、もう一人の経営者がボヤを出しことが原因で退去して、それから大学美術館の建設で取り

壊しになるまで旧「大浦食堂」は多くの藝大生に親しまれてきました。大学美術館が完成してからは、外からお見えのお客さんがずいぶん増えましたが、学生の栄養バランスと財布の中身考えた営業ポリシーは全く変わりません。定食につく日替わりのお惣菜も何週間も前から組み合わせを考え、品々ですし、十種類の手づくりサンドイッチもパンが柔らかいと評判なので、食べたことのない方はぜひいちど試してみてください。

（きたざわ・えつお／大浦食堂店主）



左：食欲をそそるメニューディスプレイ
下：「バター井」 ¥480



大浦食堂内観



大学美術館内にある大浦食堂

NEWS

2009.2~2009.7

東京藝術大学 次期学長候補者に 宮田亮平現学長を選考

東京芸術大学学長選考会議は、三月十九日開催の会議において、宮田亮平現学長の任期満了（平成二十二年三月三十一日）に伴う次期学長候補者を次の通り選考した。

【次期学長候補者】

氏名…宮田 亮平
現職…学長
任期…平成二十二年四月一日～
平成二十八年三月三十一日まで

出版会活動

◆楽譜「チャイコフスキー『弦楽のためのセレーナデ』ピアノ独奏版」を三月二十七日より発売

クラシック音楽のなかでも屈指の名曲の一つで、広く一般に愛好されている作品、チャイコフスキー「弦楽のためのセレーナデ」作品48をピアノ独奏用に編曲した楽譜。弦楽パートの多彩な連携による表情豊かな名作を、一台のピアノ独奏

用に編曲したこの版は、原曲の音楽内容を最大限に盛り込んだトランスクリプションであり、ピアノ演奏のソリストティクな魅力を併せ持った新たなレパートリーとして評価されている。



◆CD『ホルベルク組曲～マリンバアンサンブル・クイント』を四月十六日より発売

もともと弦楽合奏のために書かれたグリーグの作品とバッハのオルガン作品を、五台のマリンバによるアンサンブルによって演奏し、新たなサウンドを奏でる。《ホルベルク組曲》（グリーグ）の「前奏曲」や「リゴードン」における涼やかな音色「アリア」や「春」におけるトレモロなど、マリンバならではの響きが、原曲から新たな魅力を引き出す。



◆DVD邦楽で綴る『平家の物語』前編を五月十二日より発売

「平家物語」をテーマに、二〇〇八年九月十一日、奏楽堂において公演された「邦楽で綴る『平家の物語』前編」を完全収録したDVD。入道清盛の入寂までを題材に、既に伝承されている古典曲と新たに創作した曲とを交えて構成し、各曲の間を語りでわかりやすく綴ることによって、物語全体の把握を試みた画期的な企画となっている。



東京芸術大学出版会の出版物等は、本学藝大アートプラザ、アマゾン（ネット販売）および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ（〇五〇一五五二五二一〇二）まで

交流

◆大学間国際交流協定締結

二月二十日、ウィーン応用芸術大学（オーストリア）と本学は、芸術に関する交流及び教育研究協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。六月八日、国立台湾芸術大学（台湾）と本学は、芸術に関する交流を深めるとともに、教育及び研究に関する協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

七月二十七日、国立台北芸術大学（台湾）と本学は、芸術に関する交流を深めるとともに、教育及び研究に関する協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。これらの調印により、本学における交流協定締結校は十六か国（地域）、四十二大学等となった。

◆東京芸術大学と理化学研究所が連携協力協定を締結

三月二十四日、本学と理化学研究所は、芸術と科学という全く異なる分野がお互いの違いを知ることで、こころや意識を含む森羅万象にこれまでにない見方で迫り、それぞれの表現を深めることを目的に連携協力協定を結び、理研東京連絡事務所（千代田区）において、宮田亮平学長と野依良治理事長が連携・協力の推進に関する基本協定書に署名した。

受章・受賞

◆鈴木雅明教授が「芸術選奨文部科学大臣賞」を受賞

三月十六日、音楽学部器楽科（古楽）の鈴木雅明教授が、平成二十年度の音楽部門における優れた活動を評価され、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。

◆黒沢清教授が「第三回アジア・フィルム・アワード」（中国）作品賞、脚本賞を受賞

三月二十三日、大学院映像研究科映画専攻黒沢清教授が、「トウキョウソナタ」で第三回アジア・フィルム・アワード（中国）作品賞、脚本賞を受賞した。

◆桐野文良准教授が「二〇〇八年度日立技術士会賞」を受賞

四月十七日、大学院美術研究科文化財保存学専攻（保存科学）桐野文良准教授が取り組んだ「技術士育成支援のための図書出版等に関する特別会員グループ活動」が、社会に貢献したと評価され、二〇〇八年度日立技術士会賞を受賞した。

運営

◆東京藝大クッキー発売！

三月十九日より、藝大アートプラザに



今後は、総合的に芸術と科学を極めている両機関が、幅広い分野において組織をあげて連携協力を行い、研究・人材育成・共同制作などを進めていくこととなる。

で、東京藝大クッキーの販売が開始された。このクッキーは、本学が企画販売した「東京芸術大学カレンダー」・「藝大アートプラザオリジナル・ウオレット」に続くオリジナル企画商品で、販売価格は一〇〇〇円（税込）。



クッキーは、新百合ヶ丘と立川に店舗を持つ洋菓子店・イルフェージュのシェフ安戸哉夫氏の手によるもので、食べ応えのあるポリウムと、厳選された素材を用いた、ブラリネとアーモンドシヨラの二種の味を用意。またパッケージデザインは、美術学部デザイン科の松下計准教授が監修し、シンプルかつ贅沢な仕様が気品を感じさせる。

◆平成二十年度卒業式「悠々と!!」

三月二十五日、奏楽堂にて平成二十年度卒業式が挙行された。式は器楽科学部生による弦楽四重奏で清々しく幕を開け、学長式辞においては、箏、鼓、笛、三味線などの慶祝の雰囲気満ちた演奏が、邦楽科の教員らにより奏でられるなか宮田学長が登場し、巨大な特製パネルに「悠」という文字を揮毫した。宮田学長は「悠」を「水で心身が清められた平安な心の様子を表す字」と説明し、豊かな包容力をもつて歩んでいくよう、大学を巣立つ若者たちを激励した。

◆平成二十年度入学式

四月十日、奏楽堂にて平成二十一年度入学式が挙行された。器楽科学部生が奏でる弦楽四重奏の明るい弦の調べで歓迎するとともに、学長式辞で壇上に立った宮田学長は、壇上で揮毫した「視」という文字を掲げ、自らの目で広い視野と国

今号の特集は、“藝大の窓口”として定着した感のある、大学美術館と奏楽堂の10年を振り返る企画である。それぞれの社会との関わり方、立ち位置のようなものが徐々に明確になっていく過程が座談会で語られている。

美術館やコンサートホールは、どこの市町村にも点在するが、大学内にある、ということがやはり他とは異なる。この春、私が所属するデザイン科主催で行った企業のデザイン展でも感じたことだが、大学の中で開催されることによって、市場では見つけられない、例えばピュアな造形美や社会背景といった商品本来の魅力（市場評価とは違う）が確認できる。

過度な情報によって本質を見失ってしまう時代である。本来の価値を取り戻せる場合は、日本にそうあるものではない。二つの窓口への期待は、今後とも大きい。

藝大通信編集長
長濱雅彦

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式Webサイト (<http://www.geidai.ac.jp>) をご覧ください。

展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学大学美術館 Tel. 050-5525-2200
NTTハローダイヤル Tel. 050-5777-8600

演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学音楽学部演奏企画室
Tel. 050-5525-2300

演奏会チケットの取り扱い
藝大アートプラザ Tel. 050-5525-2102
ヴォーナル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットぴあ Tel. 0570-02-0990
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5815-5452

藝大アートプラザのご案内
(株) 藝大BioN(ピオン)
Tel. 050-5525-2102
Fax 050-5525-2486

際感覚を身につけ、より豊かな想像力と判断力を持つ優れた人間へと成長してほしいと話し、映画の撮影で使用する「カチンコ」を鳴らして、大学生生活のスタートを切る学生たちを鼓舞した。

◆天皇皇后両陛下が「尼門跡寺院の世界」展を鑑賞

天皇、皇后両陛下が、四月二十七日、本学を訪れ、大学美術館で開催中の「尼門跡寺院の世界」展を鑑賞された。

尼門跡寺院とは、皇族・公家や将軍家など、高貴な身分の女性が代々の住持を務めてきた尼寺のこと、今もなお京都・奈良に十三か寺が残っている。本展では、数百年にわたり受け継がれてきた書や調度品、肖像画、御所人形など百八十余点を展示し、寺院で培われ、伝えられてきた典雅な伝統文化を紹介。

宮田学長をはじめとする本展関係者に迎えられた両陛下は、横溝廣子准教授の説明を受けながら、皇室ゆかりの品々などを熱心にご覧になった。

なお、本展には両陛下をはじめ皇族方が相次いで来場され、尼僧たちが守り続けた高貴な伝統文化の数々を熱心にご覧になった。

◆映画「ラッシュライフ」が劇場公開

大学院映像研究科映画専攻第三期生が、

企画から資金集め、キャスティング、撮影、編集、宣伝配給まで手掛けた映画「ラッシュライフ」が、六月十三日から東京（新宿バルト9）をはじめ、大阪、広島、九州にて劇場公開された。

現代の人気作家の小説を藝大生が映像化するという企画に、ベストセラー作家・伊坂幸太郎氏が賛同。同じく企画に賛同して出演を決めた豪華キャストの面々や、出資企業各社と共に、企画プロデュース、制作までの全工程を学生が中心となって行い完成した本作品。当初は単館上映の予定だったが、大ヒットスタートを受けて、全国順次公開が決定するなど映画界の話題を集めた。

◆学長と語ろうV 奏楽堂トーク&コンサート
六月二十日、奏楽堂において、第五回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が、ゲストに文化人類学者として著名な青木保文化庁長官を招いて開催された。

第一部は、青木長官と宮田学長が、それぞれの視点から文化・芸術について語り合った。なかでも日本文化が大眾娯楽性と芸術性の両方を備えること、現在、世界中に浸透しその重要性が高く評価されていることなど、日本文化を取りまく状況が確認され、日本がアジアと連携し

て、世界に羽ばたく時期がようやくやってきたと今後の更なる発展への期待を込めて対談は終了した。



第二部コンサートでは、湯浅卓雄准教授の指揮による藝大生オーケストラが、青木長官のリクエストに応え、「ラプソディ（狂詩曲）」の名を冠した名作三曲をフルオーケストラで演奏し、割れんばかりの拍手のなか幕を閉じた。

次回、第六回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」は、水中カメラマシンの中村征夫氏を招き、十一月十四日（土）に開催される。

◆藝大とあそぼう（ようこそ！芸大ランドへ）

七月四日、奏楽堂をはじめとする音楽

学部構内の施設を舞台に、「藝大とあそぼう（ようこそ！芸大ランドへ）」が、開催された。



この「藝大とあそぼう」は、新しいファミリー・コンサートの可能性を追求するシリーズで、「子どもから大人まで楽しめる」企画を目指すもの。今回は大胆にモデルチェンジし、藝大が一日テーマ・パークに生まれ変わった。奏楽堂だけでなく、上野キャンパスの各所では、参加した一〇〇名以上の入場者で賑い、楽器を作って演奏したり、音楽に関するゲームやツアーが行われるなど、様々な音楽との出会いが繰り広げられた。

◆藝大フレンズ加入者状況
加入者数 平成二十一年七月三十一日現在
賛助フレンズ 個人一七三名
特別賛助フレンズ 法人五団体
個人一六名

◆今年度上半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

大学美術館
芸大コレクション展 春の名品選
会期 四月十四日～六月十四日
入場者数 四万四四七七名
皇女たちの信仰と御所文化 尼門跡寺院の世界
会期 四月十四日～六月十四日
入場者数 六万五三二六名

奏楽堂

第四回 奏楽堂企画学内公募演奏会
「怪談〜前衛音楽が語る怪奇な物語〜」
開催日 三月十四日
入場者数 九二一名
東京藝大シンフォニーオーケストラ
ドイツ公演記念演奏会
開催日 記念演奏会一 七月二十六日
記念演奏会二 七月三十一日
入場者数 七二五名、七三六名

